様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３０９７

研究課題名（和文）日本近世の在地型商人集団と都市的な場との関係性についての研究

研究課題名（英文）Study for relationship between merchant group in agricultural villages and the area which has urban character in the Edo period in Japan

研究代表者
多和田　雅保（Tawada, Masayasu）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：１０５２８３９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は信濃北部（現長野県）と相模中西部（現神奈川県）を対象としたものである。ともに小さな町場や都市性を持った村落を多く抱えている。
信濃においては、まず中野村の都市性を分析し、中野周辺の農村に暮らす商人たちの分布形態を明らかにした。次に善光寺町における商家の建築的特質と、商工業者たちの分布形態を明らかにした。小布施村においては越後国（現新潟県）出身の看屋史料を見出した。
相模においては都市と商人に関する資料情報を多く集積した。とくにともに市場であった久保沢と上溝については、詳細な情報を収集した。また私は相模国における小都市の都市的性格について論文を書いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本近世史研究では農村史研究、都市史研究ともに古くからの伝統を持ち、多くの研究蓄積があるが、都市と農村の関係の研究、あるいは都市と農村を統一的に捉えた研究については、蓄積が足りないのが現状である。近世は「都市の時代」とも呼ばれ、全国に中小規模の都市群が農村に入り混じって多く存在ており、かかる研究状況は打開する必要がある。本研究は商人集団の活動形態に注目することで、この問題に一石を投じようとしたものである。都市と農村の関係に関する問題は、たんに歴史研究のみならず、一極集中や地方都市の衰退といった現代社会の現状から見てもきわめて重要な課題であり、本研究はその意味でも意義を持つということができる。

研究成果の概要（英文）：This study set up two areas. One is the northern area of Shinano (Nagano prefecture), another is the central and western area of Sagami (Kanagawa prefecture). In both areas, there were many small cities, or villages which had urban character. About Shinano studies, I could examine the urban character about Nakano village, and cralify the distribution of merchants living in agricultural villages around Nakano. And I studied about the constructional character of the houses and shops built in Zenkouji Temple city, and examined the distribution of merchants , craftsmen and workmen(and women) living there. And, in Obuse village, I discovered historical documents about a fish merchant who came from Echigo (Niigata prefecture).About Sagami studies, I got a lot of information about cities and merchants. I could get detailed information about Kubosawa and Kamimizo, both were market place at the area. And I wrote the article about the urban character of many little cities in Sagami.

研究分野：日本近世史

キーワード：地方史　流通史　在方市　商人　日本史　都市史　近世史　都市と農村の関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

先行研究によると、日本近世の在地社会では19世紀に入ってから多様な商品を取り扱う農間商人が生まれ、江戸・大坂や地方城下町に基盤を持つ都市商人の支配に対抗して、彼らによる商品流通が発展することが早くから指摘されてきた（安藤精一『近世在方商業の研究』吉川弘文館1958年、伊藤好一『江戸地廻り経済の展開』柏書房、1966年など）。しかし、流通の具体相は相当複雑であったとみられるにもかかわらず、個々の品目について売買・運輸のていねいな検討がなされたとは言い難い状況であった。

その後の商品流通史研究の水準は、ミクロな視点で売買の場や商人を緻密に解明することで著しく高まりを見せた（原直史『日本近世の地域と流通』山川出版社、1996年。杉森玲子『近世日本の商人と都市社会』東京大学出版会、2006年など）。とはいえ、農間商人が特定の地域における商品流通においていかなる役割を果たしてきたかという問題については、なお未検討のまま積み残されてきたといえる。

そのなかで吉田伸之は、近世後期の在地社会で発生する多様な農間商いに従事する百姓たちが、 近隣の小都市域を拠点として中世的な商人の系統を引く香具師集団のもとで統合化を遂げていくとの注目すべき見解を示した（吉田伸之『身分的周縁と社会=文化構造』部落問題研究所、2003年）。しかし、やはり特定のフィールドに基づいた検討はなされておらず、見通しの提示に終わっていた。

いっぽう、全国各地の在地社会に多くみられた定期市（在方市）については、17 世紀には地域の商品流通の拠点として重要な役割を果たしていたが、商品流通の発展と常設店舗の展開に伴い、 18 世紀を通じてその多くが衰微したという見解がある。この点は本計画のフィールドである信濃及び 相模を含め（『長野県史』通史編近世 2（1988年）、『神奈川県史』通史編 2（1981年））、多くの自治体史で指摘されてきたが、市町と19世紀以後興隆した農間商人の興隆との関係が見えにくくなっていた。

２．研究の目的

本研究は信濃（現長野県）北部と相模（現神奈川県）中西部をフィールドとして、近世を通じて在地社会に数多く出現するに至った農間渡世商人たちの存在形態と、彼らが商品流通において果たした役割について、研究を前進させることを目的としたものである。具体的には商人集団の活動形態を、それぞれのフィールド内に散在した小都市あるいは町場（信濃北部の場合、小布施・中野・飯山・須坂・ 善光寺・松代。相模中西部の場合、伊勢原・厚木・久保沢及び原宿（現相模原市）・小田原など）との関係において具体的に捉えることで、売買や運輸の実態の解明を目指した。また彼らが扱う商品の多くが穀物や 肴、塩、薪炭、古着、小間物など民衆の生活必需品であったことを重視し、彼らの活動が地域における民衆の生活世界のなかでいかなる位置を占めたかについて見通しを示すことを目指した。

３．研究の方法

本研究計画で使用する基礎的な史料の一部はすでにそれまでの研究（JSPS 科研費 JP26370789 など）で入手しつつあったが、本研究計画は商人の移動というある程度広範囲にわたる史料の把握が必要となるため、引き続き現地における史料の所在調査・および内容調査が重要な意味を持った。 調査先としては、信濃北部については長野県立歴史館、小布施町文書館、長野市公文書館、上越 市公文書センターなどを利用し、相模については神奈川県立公文書館、神奈川大学日本常民文化 研究所、相模原市立公文書館のほか、厚木市・伊勢原市・秦野市・小田原市の図書館な

どを利用し、史料情報の収集を幅広く行うことを目指した。また、個人蔵史料も適宜調査・研究を行うものとした。以上の作業を通じて各地で得られた史料について相互の関連性を探るという方法を採ろうとした。

４．研究成果

以下、信濃北部と相模中西部にわけて成果を記す。

信濃北部においては、当該地域における近世の町場と商人集団の分布にかんする広域レベルの関係資料の所在状況を把握した。そのうえで、以下の三つの町場について個別研究を進めた。

高井郡中野（現・中野市）においては、町場化が大きく進展していた中野の陣屋元村を中心とした一帯における商人集団の分布形態について詳細を把握することができた。あわせて中野の町場および周辺農村部の現況を現地調査により把握した。

また、水内郡善光寺（現・長野市）においては、論考「幕末期における善光寺町の家作形態と生業」(『横浜国立大学教育学部紀要Ⅲ社会科学』２集、2019 年）を公表することができた。この研究は、善光寺町におけるさまざまな家作の分布形態とそれぞれの家作を利用した商工業の分布形態について、個々の町の枠組みとの関連性を念頭に置きつつ解明したものである。

続いて高井郡小布施村（現・上高井郡小布施町）において、肴屋を営んだ個人宅の歴史資料情報調査を行うことができた。すなわち同家は越後国頚城郡土底浜村（現・新潟県上越市大潟区）に拠点を置いて肴商売を行っていたが、一族が越後・蝦夷地・信州に分かれてネットワークを取り結びながら多角的経営を営んでおり、小布施が商業ネットワークのひとつの拠点として重要な位置づけにあった。本研究では同家の現当主からの聞き取りを行うとともに、現在まで残された店 舗の概要調査を行った。また、同家に歴史資料が膨大に残されていることも見出し、今後のさらなる研究の展望を得た。

つづいて相模中西部においては、当該地域における近世の町場と商人集団の分布にかんする関係資料の所在状況を広く確認することができた。そのうえで、とくに相模原地域においては、近世を通じた市場である久保沢と近代以後に展開した上溝という２つの市場について詳細なデータを収集することができ、今後の研究の進展を見通すことができた。

くわえて、相模中西部（それに隣接する地域としての武蔵西部も含む、すなわち全体として現在の神奈川県域）を対象として、（ア）近世の当該地域に散在した小規模町場群、および（イ）それらの小規模町場群と農村地帯にまたがって活動した商人の動向について研究を進め、論考「近世相武の町場について」(『地方史研究』394、2018 年８月）を公表することができた。これは、都市的な場の指標について、市場の有無に求めた『神奈川県史』の見解よりも柔軟に広げることにより、多様かつ多数の町場群が当該地域に濃密に分布し、農村も含む地域の人々の生活様式を規定していたことを指摘したものである。さらに神奈川県域における歴史資料の所在情報、勤務先である横浜国立大学内における神奈川県域の歴史に関する書籍等の所蔵状況の２点を調査し、データを収集した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 多和田雅保	４．巻 394
２．論文標題 近世相武の町場について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 地方史研究	６．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 多和田雅保	４．巻 2
２．論文標題 幕末期における善光寺町の家作形態と生業	５．発行年 2019年
３．雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要Ⅲ，社会科学	６．最初と最後の頁 117-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00012301	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 多和田雅保
２．発表標題 信州の諸都市と市場
３．学会等名 史学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考